中將棊

大と異なり、大象棋と混ずべからず、ゆゑに今ゑばらく音を借て泰の字を用ゆ、遊宋の僧の傳ふる所にやと、三島氏のいへるはさる事にや、いまだ考へず、

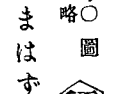
〔男重寶記三〕盤上の事

中將棊目、馬數九十三枚、

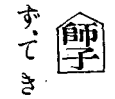
○按ズルニ、中將棊指南抄ニ、盤面之圖、成駒之並圖、駒行方ノ圖アリ、今之ヲ略ス、

〔諸人重寶記三〕象戯の指樣

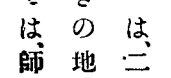
中將棊、馬の行方圖に云るしをく也、○圖略



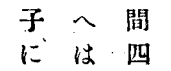
は、二間四方は我まいにし、一間四方はゐぐひする也、



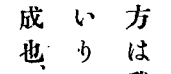
角四方二間あひにもかまはず、てきの地へはいりて奔王に成也、



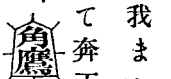
あとさきよこ二間は、あひにかまはず、てきの地へはいりては、師子に成也、



頭二間殘りはしる、頭一間いぐひ、



さきのすみ二方二間、殘りはしる、二間の角いぐひ也、兩方共に、馬かへ次第、とり捨也、歩のなり金一枚にて、玉を詰申事法度也、



あれば、玉將なくてもくるしからむ、

〔中將棊絹篩序〕方今昇平之化、諸藝盛行、昨日所廢、今日再興、朝來所無、晩來忽有、元祿中所出中將棊圖前後二本、一則羅火、一則磨滅、書賈乘時、就余求作爲絹篩、余案將棊亦有小、中、大、大々、摩訶大々、泰將棊等數種、而坊間唯刻小中二種之書、未及其他、如大、大々、摩訶大々、泰將棊等、其理原屬一致、宜兼而行之、因原本中將棊舊圖、加之校正、更附諸種之圖式、以爲一書、書賈心花不可言、要一時刻之流播廣遠、嗚呼坊間刻書、亦盛也哉、

文政改元之仲夏　　鶴峯戊申識

〔中將棊絹篩〕それ中象棋は、盤面二八の十六目づゝ九ッに分ち、これを九宮に配し、都て一百四十四目にして局をなす、これすなはち縱横各十二目なれば、十二支を以て合文とす、

駒數は、味方四十六枚、敵四十六枚、都合九十二枚なり、馬は取捨にて、小象棋のごとく、取馬を打事